海の道むなかた館　平成30年度
館長講座「日本古代史の諸問題」第11回

平成31年2月10日(日)

海の道むなかた館長　西谷　正

泰山における封禅

Ⅰ　はじめに

平成28年9月29日(木)　初めて泰山に登る

Ⅱ　泰山と岱廟

（1）神宿る山・泰山―天の祭祀

（2）神宿る里・岱廟―地の祭祀

Ⅲ　白村江における敗戦と、その後

（1）外交の修復　対新羅・唐

（2）唐使の来朝　祢軍墓誌の発見

Ⅳ　倭人の封禅への参列

（1）封禅とは

（2）倭人の封禅への参列の意義

Ⅴ　おわりに

北東アジアにおける統一国家群　唐・新羅・渤海そして倭

「東アジア共同体」の形成　未来に向けて

【お知らせ】

次回の館長講座は3月10(日)13：30～(2時間程度) 講義室にて開催いたします。

日本書紀　巻第二十七

天命開別天皇（天智）

四年、春二月二五日、間人大后（孝徳の皇后、中大兄の妹）が薨じた。

この月、百済国の官位の階級を（日本国の官位との対応を）比較し勘（案）した。よって、佐平福信の功で、鬼室集斯（福信の子か）に小錦下（従五位下）を授けた。（その本の位は達率（一六位階の第二）。）また、百済の百姓男女四〇〇余人を、近江の国の神前郡に居（住）させた。

三月一日、間人大后のために、三三〇人を（得）度した。

この月、神前郡の百済人に田を給した。

秋八月、達率答炑春初を遣わし、城を長門（山口県西半）の国に築いた。達率憶礼福留、達率四比福夫を筑紫（福岡県）の国に遣わし、大野と椽の二城を築いた。耽羅が遣使し、来朝した。

九月二三日、唐国が、朝散大夫、沂州（山東省臨沂県兗州）の司馬（武官長）、上柱国（勲位一二階の一位）の劉徳高らを遣わした。（らとは、右戎衛の郎将、上柱国の百済（人の）禰軍、朝散大夫、（上）柱国の郭務悰をいう。凡そ二五四人。七月二八日、対馬についた。九月二〇日、筑紫についた。二二日に上表文の函を進った。）

冬一〇月一一日、菟道（京都府宇治市）で、大がかりな閲（兵）をした。

一一月一三日、劉徳高らに饗（宴）を賜わった。

一二月一四日、劉徳高らに物を賜わった。

この月、劉徳高らが帰国した。

この年、小錦（五位）守君大石らを大唐に遣わした。云々。（らとは、小山（七位）坂合部連石積、大乙（正八位）吉士岐彌、吉士針間をいう。思うに唐の使人を送ったのであろうか。）

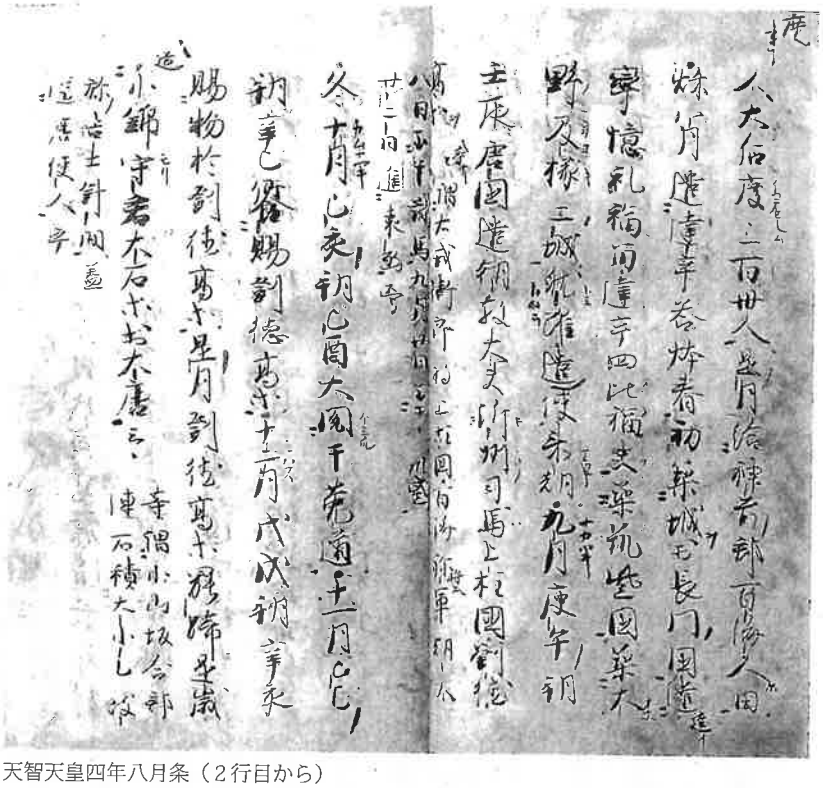
山田宗睦訳、一九九二『日本書紀（下）』教育社新書

大野城の築造

『日本書紀』によれば、天智天皇二年（六六三）、白村江の戦にて敗れた倭は、唐・新羅からの侵攻に備え、翌三年には防人と烽を置き、大宰府の入り口となる福岡平野の南に水城を築造した。さらに翌四年には長門国に城、筑紫国に大野城、基肄城を築いたとある。

大野城は四王寺山の山頂を中心として尾根から谷をまたいで総延長約八キロメートルにわたって巡らされた、東西約一・五キロメートル、南北約三キロメートルの範囲が城域の日本最大級の朝鮮式山城であった。土塁で囲まれた城内へ入るために設けられた城門は、現在九箇所も確認されており、城内には八地区、約七十棟の建物跡が確認されている。主に米などの食糧を備蓄するための倉庫群が建てられていたとみられ、「焼米ケ原」という地点では炭化した米粒が多数見つかっている。このように、大野城は当時の緊迫した東アジアの国際情勢を如実に反映した構築物だったのである。（岡寺）

九州歴史資料館、二〇一五年四王寺山の一三五〇年―大野城から祈りの山へ―特別展図録



天智天皇四年八月条（2行目から）

巻末　奥書

重要文化財

日本書紀　巻第二十七　兼永本

二十八冊のうち　一冊

紙本墨書

縦　二五・二　横　一五・四

平安時代・十一世紀

京都・北野天満宮所蔵

『日本書紀』は、舎人親王を総裁として、養老四年（七二〇）に完成、元正天皇に献上されたわが国最初の勅撰の正史である。本書はその古写本で、南北朝時代に神祇伯資継王が所持し、神祇伯家の衰退後、卜部兼永（一四六七～一五三六）が伝領し、後に元禄十五年（一七〇二）に菅原道真公を祀った神社の総本社である北野天満宮に寄進された。本写本は五類に分けられる。巻二十七は第一類に属し、古本系と呼ばれて、それ以外の卜部本系とは系統が異なる。白村江の敗戦とその後の水城や大野城、椽（基肄）城の築城を記す。巻二十七の現存最古の写本であり、天智天皇四年（六六五）に大野城が築かれたことを記す最古の文献史料である。（酒井）

て　和親を勧めた。しかし　百済は嶮しい地勢と遠隔をたのみ　天の常道を侮どって高ぶったので　皇帝は烈火のごとく憤って　これを討つことにした。旗の指さす所は　いちど戦えば大いに平定されたのであった。もとより王宮を池と化し　邸宅を牢獄として　子孫へのいましめとなし　また　その源を塞ぎ　根を抜いて　後裔に訓を垂れるべきだが　しかし、従う者は抱き　叛く者は討つというのが　前王の良き法であり　滅ぶ者は興し　絶える者は継ぐというのが　先哲の通則である。事はかならず　いにしえをかがみとして　往古の書物が数多く伝えている。故に　さきの百済大司稼正卿　扶余隆を熊津都督に任じて　その祭祀を守らせ　国土を保たせるから　新羅と相寄りあって　永く友邦となり　それぞれ長年の恨みを除いて　修好し　和親して　各自詔命を奉じて　王室を擁護する諸侯として永く服属せよ。また　使者　右威衛将軍魯城県公の劉仁願を遣わし　親しく臨んで説得し　この旨の成立を宣言す。これを約定するには婚姻をもってし　これを述べるには誓約をもってし　いけにえを屠って血をすすり　ともに終始を全うし　災害は分かちあい　患いは助けあい　恩義は兄弟のごとくし　詔命はつつしんで奉じあえて失墜せず　すでに盟約を果したのちは　ともに節操堅固にして　よく艱苦に堪えるようにすべきである。もし　盟約に背き　心変りして兵を起こし軍を動かして　辺境を侵すことがあれば神はこれを監察して　百の災厄をここにくだすであろう。子孫は育たず　国家は守れず　天神の祭祀は磨滅して　あとにはなにも残らないであろう。ゆえに　金書鉄巻をつくって　それを宗廟に蔵し　子孫万代　あえて違反がないようにせよ。神はこれを聞いてこれを受けたまえ　福を垂れたまえ」と書いてあった。これは劉仁軌の文章である。この盟約を終えるや　いけにえと供物は祭壇の北に埋め　盟約の文書はわが宗廟に蔵した。そこで　劉仁軌はわが国の使者と百済・耽羅・倭人の四国の使者をひきいて　海を渡って西に帰り　みんなが寄って　泰山に祭った。

王は王子の政明を立てて太子とし　大赦を行なった。冬　一善州と居列州の二州の民に　軍需物資を河西州まで運ばせた。絹布をはかるに　これまでは十尋をもって一匹〔緞〕としたが　長さ七歩　幅二尺をもって一匹とするように改めた。

林　英樹訳、一九七四『三国史記　上　新羅本紀』三一書房

三国史記　巻第六

新羅本紀　第六　　文武王（上）

五年〔六六五〕春二月　中侍の文訓が辞職したので　伊湌の真福を中侍に任じた。伊湌の文王が死んだので　王子の礼をもってこれを葬った。唐の皇帝が使者を遣わして　弔意を表し　あわせて紫衣一着　腰帯一条　彩色の綾羅百緞　生絹二百緞を贈ってくれたので　王は唐の使者に黄金と絹布をふんだんに贈った。

秋八月　王は熊津の就利山で　勅使　劉仁願および熊津都督　扶余隆と盟約を結んだ。

はじめ　百済は扶余璋〔武王〕の時代以来　高句麗と連合して　しばしば領土を侵してきたので　わが国は使者を唐へ派遣して救援を求めたのであった。その後　蘇定方が百済を平定して　軍を引揚げると　残兵たちはまた叛いた。王は鎮守使の劉仁願や劉仁軌などとともに　数年かかって　ようやくこれを平らげた。それであるのに　唐の高宗は扶余隆に詔りして　帰って残党たちを慰撫するようにと命じ　また　わが国と和親を結ばせたのであった。そこで　三者は白馬を屠って　まず神々と川や谷の神を祭り　そのあとで　たがいにその血をすすって盟約を結んだ。その盟約文は

「さきに百済の先王は反逆と順従との道をまちがえて　隣国と友好を厚くせず　親姻とも仲睦まじくせず　高句麗と結托し　倭国と通交して　あいともに残虐と横暴とをなし　新羅を侵して削り　村を掠め　城を屠り　平安な年はまずなかった。天子は一物でも　その所を失うことを憂い　罪なき百姓を憐れんで　しばしば　使者を遣わし

乙丑　唐高宗麟德二年（六六五）

八月壬子、劉仁願、扶餘隆、新羅王法敏ト熊津城ニ白馬ヲ刑シテ盟セシム。○十月癸亥、高句麗王子福男來朝ス。○是歲、劉仁軌、新羅、百濟、耽羅、倭等四國ノ酋長ヲ領シテ泰山ノ封ニ赴會ス。

〔舊唐書〕卷四本紀第四高宗上　麟德二年十月癸亥、高麗王高藏、遣其子福男來朝。

〔舊唐書〕卷八十四列傳第三十四劉仁軌　麟德二年、封泰山、仁軌領新羅及百濟、耽羅、倭四國酋長赴會、高宗甚悅、擢拜大司憲。

〔舊唐書〕一百九十九上列傳第一百四十九東夷百濟　麟德二年八月、隆到熊津城、與新羅王法敏、刑白馬而盟、先祀神祇及川谷之神、而後歃血、其盟文曰、往者百濟先王、迷於逆順、不敦鄰好、不睦親姻、結託高麗、交通倭國、共爲殘暴、侵削新羅、破邑屠城、略無寧歲、天子憫一物之失所、憐百姓之無辜、頻命行人、遣其和好、負險恃遠、侮慢天經、皇赫斯怒、恭行弔伐、旌旗所指、一戎大定、固可蕩宮汚宅、作誡來裔、塞源拔本、垂訓後昆、然懷柔伐叛、前王之令典、興亡繼絕、往哲之通規、事必師古、傳諸彝冊、故立前百濟太子司稼正卿扶餘隆爲熊津都督、守其祭祀、保其桑梓、依倚新羅、長爲與國、各除宿憾、結好和親、恭承詔命、永爲藩服、仍遣使人右威衛將軍魯城縣公劉仁願、親臨勸諭、具宣成旨、約之以婚姻、申之以盟誓、刑牲歃血、共敦終始、分災恤患、恩若弟兄、祗奉綸言、不敢失墜、既盟之後、共保歲寒、若有棄信不恒、二三其德、興兵動衆、侵犯邊陲、明神鑒之、百殃是降、子孫不昌、社稷無守、禋祀磨滅、罔有遺餘、故作金書鐵契、藏之宗廟、子孫萬代、無或敢犯、神之聽之、是饗是福、劉仁軌之辭也、歃訖、埋幣帛於壇下之吉地、藏其盟書於新羅之廟、仁願、仁軌等既還、隆擢新羅、尋歸京師。

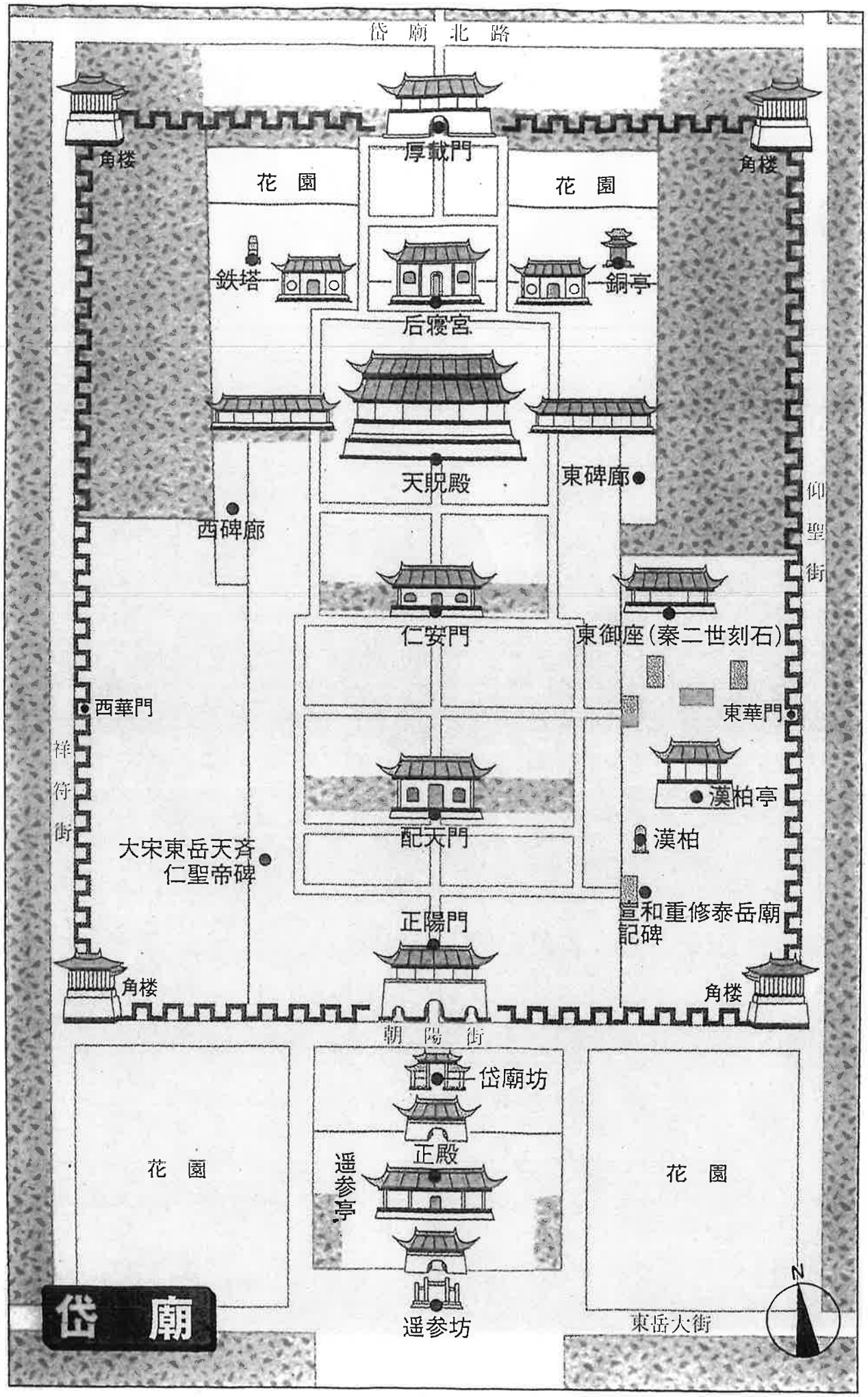
〔唐書〕一百八列傳第三十三劉仁軌　及封太山、仁軌乃率新羅、百濟、儋羅、倭四國酋長赴會、天子大悅、擢爲大司憲、遷右相兼檢校太子左中護、累功封樂城縣男。

〔唐書〕二百二十列傳第一百四十五東夷百濟　麟德二年、與新羅王會熊津城、刑白馬之盟、仁軌爲盟辭曰、往百濟先王、罔顧逆順、不敦鄰不睦親、與高麗、倭、共侵削新羅、破邑屠城、天子憐百姓無辜、命行人修好、先王負險恃遐、侮慢弗恭、皇赫斯怒、是伐是夷、但興亡繼絕、王者通制、故立前太子隆爲熊津都督、守其祭祀、附杖新羅、長爲與國、結好除怨、恭天子命、永爲藩服、右威衛將軍魯城縣公仁願、親臨厥盟、有武其德、興兵動衆、明神監之、百殃是降、子孫不育、社稷無守、世世毋敢犯、乃作金書鐵契、藏新羅廟中、仁願等還、隆畏衆攜散、亦歸京師。

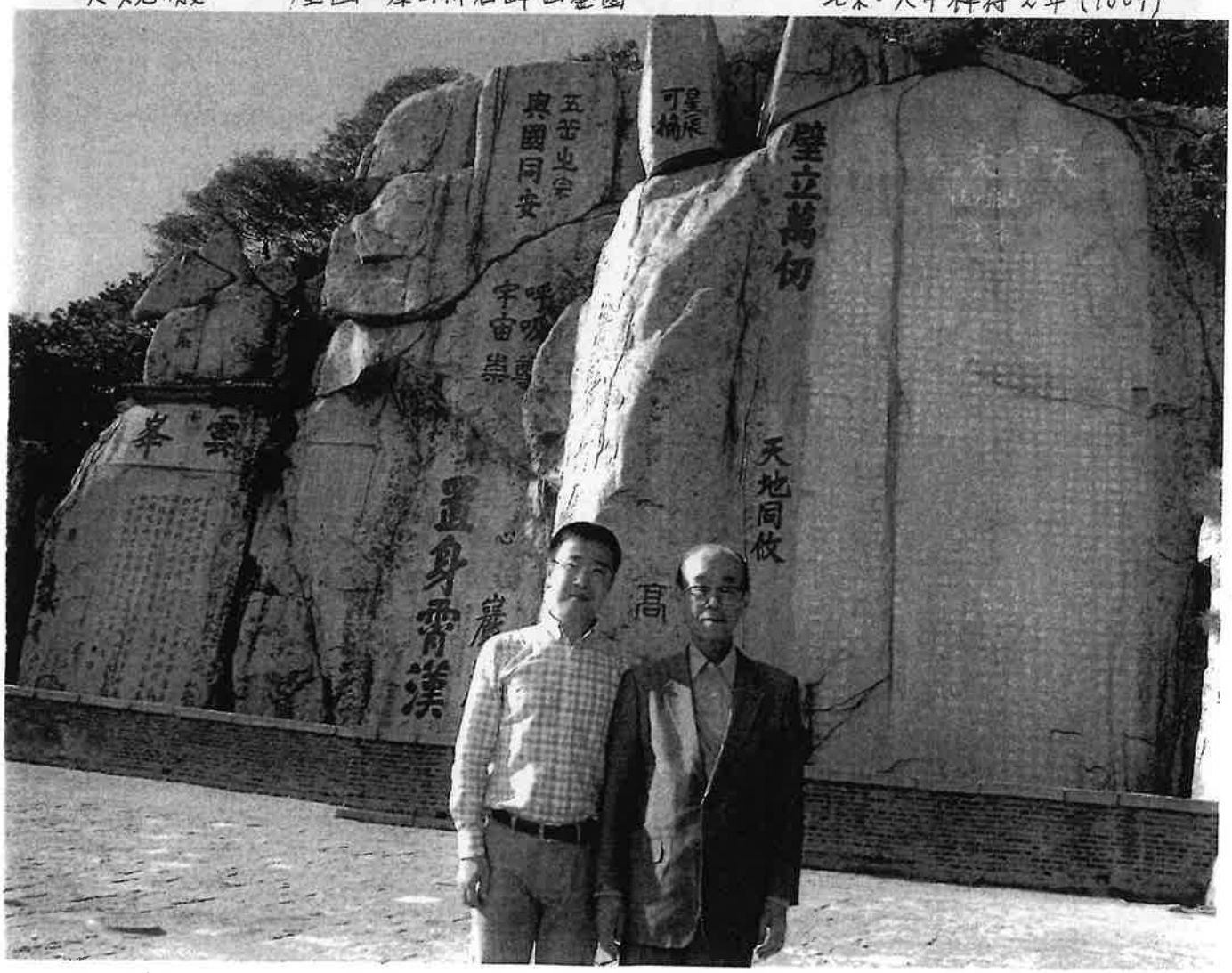
〔資治通鑑〕卷二百一唐紀十七高宗中之上　麟德二年、上命熊津都尉扶餘隆與新羅王法敏釋去舊怨、去羌呂翻、八月壬子、同盟于熊津城、劉仁軌以新羅、百濟、耽羅、倭國使者、浮海西還、耽羅國、一曰儋羅、居新羅武州南島上、初附百濟、後附新羅、會祠泰山、高麗亦遣太子福男來侍祠、○十月丙寅、上發東都、從駕文武儀杖、數百里不絕、從才用翻、列營置幕、彌亘原野、東自高麗西至波斯烏長諸國、自吐火羅、踰五嶺、至婆羅門、逾北、踰山行六百里、得烏萇國、長蘆曰萇、朝會者各帥其屬扈從、穹廬毳幕、牛羊駝馬、塡咽道路、時比歲豐稔、朝直遙翻、帥讀曰率、從才用翻、比毗至翻、米斗至五錢、麥豆不列于市。

朝鮮史編集会編、一九三三『朝鮮史』第一編第三卷、朝鮮總督府

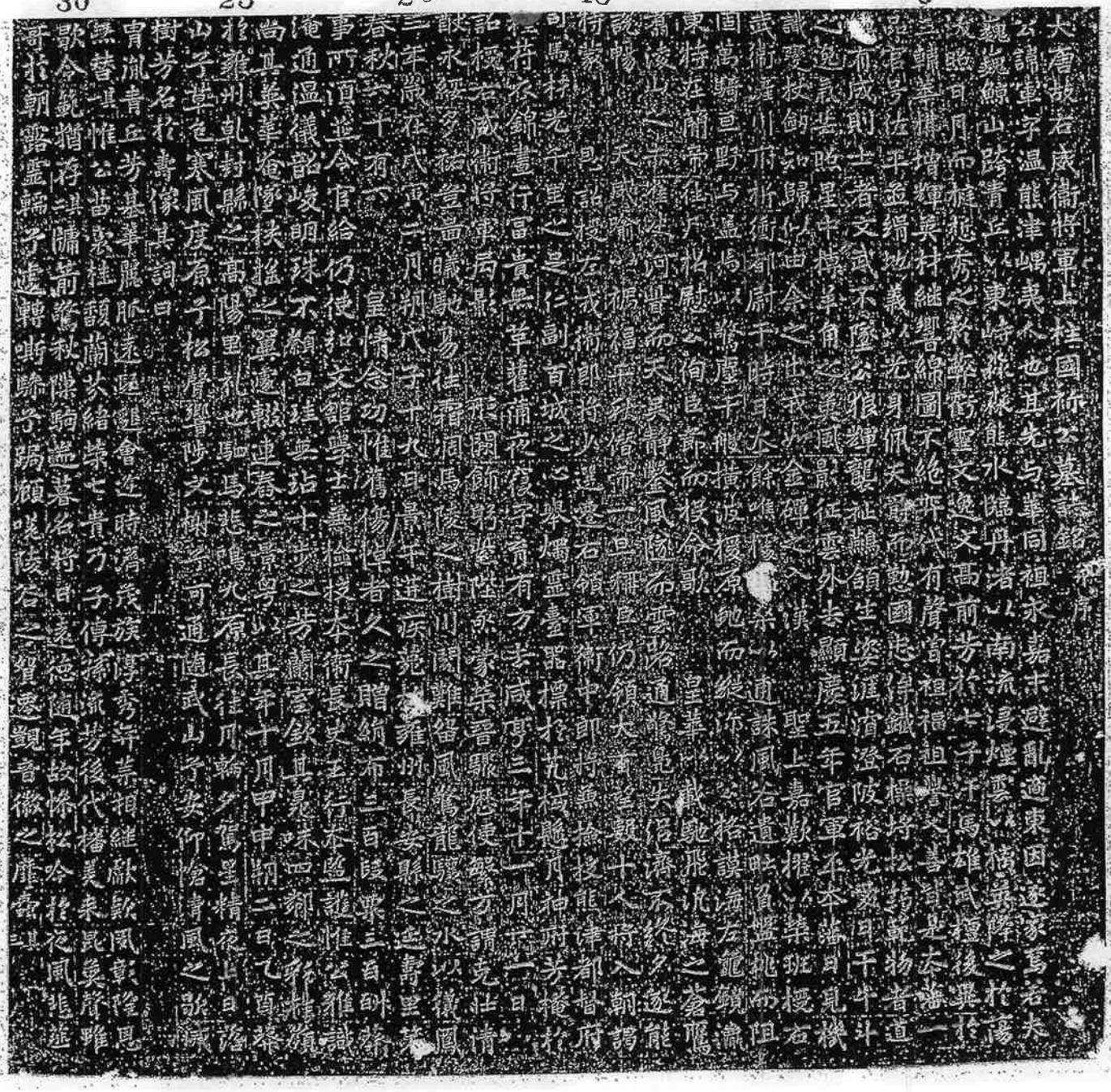
泰山の十八盤


岱廟北路
厚載門
角楼
角楼
花園
花園
鉄塔
銅亭
后寢宮
天貺殿
東碑廊
西碑廊
仰聖街
仁安門
東御座(秦二世刻石)
西華門
東華門
祥符街
漢柏亭
配天門
漢柏
大宋東岳天齊仁聖帝碑
宣和重修泰岳廟記碑
正陽門
角楼
角楼
朝陽街
岱廟坊
正殿
遥参亭
花園
花園
遥参坊
東岳大街
N
岱廟

天貺殿　壁画　泰山神启跸回銮图　北宋・大中祥符2年（1009）



2016年9月29日　徐晟さんと　玄宗李隆基　紀泰山銘　開元14年（726）



大唐故右威衛將軍上柱國祢公墓誌銘并序

公諱軍字温熊津嶋夷人也其先与華同祖永嘉末避亂遷東因遂家焉若夫
巍巍鯨山跨青丘之東峙淥淥龍水臨丹渚之南流浸煙雲以橫吳降之於唐
文照日月而榜起秀之於幹衍靈文逸文高前芳於七子千馬雄武相後異於
三韓準增輝吳村繼響綿圖不絶世代有膺宣祖祖迫愛文書負史筆一
從宦學佐平並絹地義以光身佩天爵而勤國忠得鐵石操持玉筋物者道
德而成則士者文武不隱公狼輝觀祖鵬領生姿渟渟陂裕光爽日干斗
之逸氣吐星中棹華角之英風景征雲外去顯慶五年官軍平本蕃月見樣
識覆枝飼知歸化由今之世式少金碑之人漢聖上嘉歎擢柴班授右
武衛達川府折衝都尉于時日本餘燼猶懷遺誅風右遣吐負檻抛而阻
固高蹈亘野与蓋鳥以鼎厘千飛横沒授原鮑而絶沛之蒼鷹
東特在蘭帝往沉招慰之徇邑帝而授今歌
凌山一宗推仁河昔而天美青鑿風隧石雲若通惟見天倪語乃化之迹能
有天賦輸一裕而一日獨自仍領大青之數十人拾入朝謁
說暢千乡信而一日獨自仍領大青之數十人拾入朝謁
見詔授左戎衛郎將少選右領軍衛中郎將兼拾北津都督府
司馬材光千里之仁副百城之心舉壇豈器標於九棘飛月柏府芳檢於
行衣錦晝行冒黃無草雉蒲花復子青有乃去咸亨三年十一月廿一日
詔授右威衛行軍長史兼管內諸軍事賜馬一匹仍令使人
敢永綏多祐豈曷眺易往看周馬陵之樹山閣難留風鳴龍隴之水以復圓
三年歲在戊寅二月朔八子十九日晨午遊沉光於羅州長安鄉之遷第
春秋六十有二
皇情念功惟傷悼者久之贈絹布三百段粟三百斛葬
事所須並令官給仍使扣文部學士書銘授本衛長史王行本造誌
俺通温儀韶岐明珠不顧白圭無沾十步之芳蘭宜欽其晃味四鄰之彩
尚其華蕃墜扶桑之重遷賴連春之景望以其年十月甲申朔二日乙酉葬
於羅州乾封縣之高陽里礼也馳馬悲鳴九原長往月輪夕駕星精夜出
山子草色寒風度原子松青響陟之樹之可通隨武山子矣作悲青風之歌
樹芳名於壽像其詞曰
青渠青丘芳基華麗脈遠邇會迄時潛發族厚秀華業相繼猷風數隆見
無替其惟公苦衆桂頡蘭以給柴七貴乃子停孫流芳後代播美來昆奠厥雖
歌今銘贈存其隨蕭蕭秋隙駟邁暮名村日表德圖年故怵松吟於花風悲逝
寄於朝露靈輪子遠轉嘶鳴子踟顧咲陵石之質遂覩者微之庭窟

祢軍墓誌・蓋

祢軍墓誌銘

（蓋）大唐故右／威衛將軍／上柱國祢／公墓誌銘

1 大唐故右威衛將軍上柱國祢公墓誌銘并序

2 公諱軍，字温，熊津嵎夷人也。其先与華同祖。永嘉末，避亂適東，因遂家焉。若夫

3 巍巍鯨山，跨青丘以東峙，淼淼熊水，臨丹渚以南流。浸煙雲以摛英，降之於蕩沃

4 沃，照日月而捷悊，秀之於蔽虧，靈文逸文，高前芳於七子，汗馬雄武，擅後異於

5 三韓，華構增輝，英材繼響。綿圖不絶，奕代有聲。曾祖福・祖譽・父善，皆是本藩

6 品，官号佐平。並緝地義以光身，佩天爵而勲國。忠侔鐵石，操埒松筠。範物者，道

7 德有成。則士者，文武不墜。公狼輝襲祉，鸞領生姿。涯濬澄陂，裕光愛日。干牛斗

8 之逸氣，芒照星中，搏羊角之英風，影征雲外。去顯慶五年，官軍平本藩日，見機

9 識變，杖劍知歸，似由余之出戎，如金磾之入漢。　聖上嘉歎，擢以榮班，授右

10 武衛滄川府折衝都尉。于時日本餘噍，據扶桑以通誅，風谷遺甿，負盤桃而阻

11 固。萬騎亘野，与蓋馬以驚塵，千艘横波，援原虵而縱獺。以公格謨海左，龜鏡瀛

12 東，特在簡帝，往尸招慰。公佝臣節而投命，歌　皇華以載馳。飛汎海之蒼鷹，

13 翥凌山之赤雀。決河皆而天吳靜，鑿風隧而雲路通。驚鳧失侶，濟不終夕，遂能

14 説暢　天威，喻以禍福千秋。僭帝一旦稱臣，仍領大首望數十人，將入朝謁，

15 特蒙　恩詔，授左戎衛郎將，少選遷右領軍衛中郎將兼檢校熊津都督府

16 司馬。材光千里之足，仁副百城之心。曝燭靈臺，器標於兀槭，懸月神府，芳掩於

17 桂符。衣錦晝行，富貴無革。雀蒲夜寢，宇育有方。去咸亨三年十一月廿一日

18 詔授右威衛將軍。局影　彤闕，飾躬紫陛。亟蒙榮晉，驟歷便繁。方謂克壯清

19 猷，永綏多祐。豈冒曦馳易往，霜凋馬陵之樹，川閲難留，風驚龍驤之水。以儀鳳

20 三年歳在戊寅二月朔戊子十九日景午遘疾，薨於雍州長安縣之延壽里第，

21 春秋六十有六。　皇情念功惟舊，傷悼者久之，贈絹布三百段・粟三百斛，葬

22 事所須，並令官給，仍使弘文館學士兼檢校本衛長史王行本監護。惟公雅識

23 淹通，温儀韶峻，明珠不類，白珪無玷。十步之芳蘭，室欽其臭味，四鄰之彩桂，嶺

24 尚其英華。奄墜扶摇之翼，遽輟連舂之景。粤以其年十月甲申朔二日乙酉葬

25 於雍州乾封縣之高陽里，礼也。駟馬悲鳴，九原長往，月輪夕駕，星精夜上。日落

26 山兮草色寒，風度原兮松聲響。陟文樹兮可通，隨武山兮安仰。愴情風之歇滅，

27 樹芳名於壽像。其詞曰：

28 青胤青丘，芳基華麗。脈遠遐邈，會逢時濟。茂族淳秀，奕葉相繼。獻歌夙彰，隆恩

29 無替。其一：惟公苗裔，桂馥蘭芬。緒榮七貴，乃子傳孫。流芳後代，播美來昆。英聲雖

30 歇，令範猶存。其二：牖箭驚秋，隙駒遄暮。名將日遠，德隨年故。慘松吟於夜風，悲韮

31 哥於朝露，靈轜兮遽轉，嘶驂兮踟顧。嗟陵谷之貿遷，覬音徽之靡靄。其三。

明治大学古代学研究所・東アジア石刻文物研究所主催、二〇一二
新発見百済人「祢氏（でいし）墓誌」と文武紀東アジアと「日本」
国際シンポジウム資料集より

井真成墓誌

一合

中国陝西省西安市東郊出土
石製
蓋：縦三七・〇　横三七・〇　厚七・〇
身：縦三九・五　横三九・五　厚一〇・〇
唐時代　開元二十二年（七三四）
西北大学文博学院［中国］

平成十六年（二〇〇四）四月、西安市内の工事現場で発見された日本人「井真成」の墓誌である。墓誌とは、死者の名前や経歴などを記し墓に埋めたものである。誌文から「井真成」は、開元二十二年（七三四）に向学の志半ばにして三十六歳の若さで急逝し、玄宗皇帝により「尚衣奉御」（従五品官）の役職を贈られたことがわかる。年齢から類推すれば、養老元年（七一七）、遣唐使の一員として吉備真備や阿倍仲麻呂らとともに入唐したことになる。「井真成」の日本名については、葛井真成と井上真成の両説がある。誌石は一行十六字十六行の罫線を引いた小振りなものを用い、ほぼ同じ大きさの蓋石をともなう。

（松川）

「井真成」墓誌拓本〈釈文〉

贈尚衣奉御井公墓誌文并序
公姓井字真成國号日本才稱天縱故能
□命遠邦馳騁上國蹈禮樂襲衣冠束帶
□朝難与儔矣豈圖強學不倦聞道未終
□遇移舟隙逢奔駟以開元廿二年正月
□日乃終于官第春秋卅六　皇上
□傷追崇有典　詔贈尚衣奉御葬令官
□即以其年二月四日窆于萬年縣滻水
□原禮也嗚呼素車曉引丹旐行哀嗟遠
□兮頽暮日指窮郊兮悲夜臺其辭曰
□乃天常哀茲遠方形既理於異土魂庶
歸於故郷

（約四五％縮小）

2005『専修大学・西北大学共同研究プロジェクト資料集』

二〇〇五　開館記念特別展「美の国　日本」九州国立博物館編　西日本新聞社刊

誌蓋